

インタビューにおける応答追求場面での主観的尺度によるスタンスの示し方

ー労働条件の受容に関する質問に対する（元）日本語教師の回答からー

勝部 三奈子(大阪大学大学院生)

1. はじめに

調査を目的とする半構造化インタビューにおいて、調査者の期待するような応答が得られなかった場合、調査者は自らの期待する応答を得るべく、被調査者の前の応答を資源として用いながら再度応答を追求する場面がしばしばある(Prior, 2016)。本研究の目的は、筆者が日本語学校の非常勤の日本語教師に「授業準備に対して報酬が与えられていないこと」というデリケートなトピックに関して応答を追求している場面を取り上げ、インタビューの参加者双方に適切とみなされる応答がどのように構築されるかを「再格付け(regrading: Bilmes, 2019)」に焦点を当てて記述することである。

2. 先行研究

相互行為場面において、行為を達成するためにある特定の一つの定式がなぜ選択されたのかという定式化(formulation)については、会話分析においてすでに数多くの研究がなされている(Pomerantz, 1986; Bilmes, 2011; Deppermann, 2011)。その定式化の中でも、1つの対象に対して1つの表現がある尺度の中で位置付けられた後に、2つ目の表現がその尺度の別の場所に位置付けられる「再格付け」の分析は、連鎖の中の意味構築のプロセスや、語句そのものの含意や発話の機能の解明への新たな手がかりとして、近年多くの研究がなされている(Bilmes, 2019)。再格付けに用いられる尺度には様々なものがあるが、例えば岡田(2015)では、日本の大学の教室談話場面において出席率が悪いことを怪我のせいにする学生に対して、自らも怪我をしている教師が学生と教師の「年齢差」に基づく「怪我の回復速度」という尺度を用いて、自らを回復速度が遅い方に、学生を回復速度の速い方に位置づけることによって、出席率の悪さを怪我のせいにしないうようにという注意を効果的に達成していることを明らかにしている。またPrior(2016)では、カナダのベトナム系移民が職場いじめについて語るインタビューの場面を分析し、インタビュアーやインタビュイーが「いじめの程度」、「暴力性」などの様々な尺度を用いることによって、どのようにその出来事に対するスタンスが構築されていくかを明らかにしている。本研究は日本語学校の非常勤講師に授業準備という時間外労働に報酬が支払われないことについての応答追求する場面を分析するが、先行研究にならい、その場面でどのような尺度が用いられており、それが相互行為の達成にどのように関わっているか、その尺度によってその場の意味がどのように構築されているかを分析する。

3. データと方法

ここではまず分析するデータの背景である国内の日本語教師の労働条件の状況について述べる。文化庁の平成30年度の報告では、法務省告示機関、いわゆる「日本語学校」の日本語教師数は10,503人で、その中の約7~8割が非常勤講師であるとされている。非常勤講師への報酬は学校によって違いはあるが、概ね授業を実施した教授活動にのみ時給もしくは分給が支払われる。そのほかの授業準備や進路指導、面接などは時間外労働として見なされることが多い。これらの時間外労働には多くの学校で手当が出るものの、それらへの従事時間に見合う金額を支払われることは少なく、多くの非常勤講師がそのことについて不満を持っていると考えられている。ゆえに日本語学校の非常勤講師は早期の離職率も高いが、一方で長年続けているベテランの非常勤講師が多数存在することも事実である。続けているということは、非常勤講師たちはなんらかの合理性をもって労働条件を受容していると考えられるが、不合理な労働条件が客観的事実としては明白であることによって、インタビューでこのことを質問することは、非常にデリケートな問題として取り扱われることになる。

本研究に用いるデータは日本語学校の非常勤日本語教師/元日本語教師に行った1対1のインタビュー3組、2対1フオ

1 日本語教育に携わる人材は多様だが、文化庁文化審議会国語分科会(2019)『日本語教育人材の養成・研修の在り方(報告)』では「日本語学習者に直接日本語を指導する者」を「日本語教師」として分類している。

一カス・グループ2組(各約90分, 計約450分)の録音・録画データである。この当時の研究目的は、不合理な条件の中でも非常勤日本語教師を長年続けるのはなぜかを探ることであり、いずれも調査者(筆者)が「非常勤講師を続けている/やめた理由は何か」「専任講師になりたいと思ったことはないか」など約8項目を対象者に尋ねている。なお対象者は全員、調査者の元同僚である³。本研究では会話分析の手法を用いてこれらの録音・録画データの文字化を行い、その中で労働条件の受容についての応答追求とそれに対する応答の中でそれぞれどのような再格付けが行われているかに焦点を当てて分析した。

4. 分析

下記には日本語教師歴15年以上の非常勤講師2名(いずれも女性, インタビュー当時50代後半~60代)に対して筆者が行なった1対1のインタビューにおける応答追求とそれに対する応答場面を記述する。(以下インタビュー=IR/抜粋1インタビュー=IE1/抜粋2インタビュー=IE2)

4.1 「好きっていうかおもしろい」

この抜粋1-1の直前にはIE1が親の介護で義務的に家にいたが、家にいる時間が長いからこそ好きに本を読んだり資料を整理することができ、またそれが授業準備に結びつけられていたという趣旨のことを語っている。下記の抜粋はその直後の場面で、IRはこの語りを無報酬の時間外労働というインタビュートピックの材料として取り扱い、質問を構成している。

[抜粋1-1] (インタビュー開始から45分後) (以下インタビュー=IR/インタビュー=IE1)

1. IR : でもなんか¹, (0.3) : >ほんと<それって(.)なかなかお金にならないじゃないですか²,
2. それに対してあんまり(.)別にいつかって感じですか?
3. (1.4)
4. IR : >要するに<準備:すごい時間かかるじゃないですか³,
5. IE1: [うん.
6. (0.3)
7. IE1: で[ももしかしたら⁴,
8. IR : [もう
9. IR : う:ん.
10. (1.5)
11. IE1: そうでしょ?>だから結局<(.)じゃあ分給にしたらいくらになるんだ
12. [時給にしたら何-んなるんだっていうの[を何度も思ったことあるけど⁵,
13. IR : [>そそそそそ< [う:ん.
14. IR : う:ん.
15. (1.6)
16. IE1: でもなんか⁶- (0.3) そうゆうふうには.. (0.9) やること好きだった⁷, そうゆう
17. [なんか準備したりすることとか好きだった⁸,
18. IR : [う ん う ん う ん (.) う ん う ん う ん.
19. IE1 : .hそれがうまく授業にいっかせたりする[とす⁹ごく (.) 喜びでもあったから¹⁰,
20. IR : [う ん う ん う ん (.) そうですね.

1行目から4行目にかけてIRは授業準備に報酬がでないことについて問題にならないかを尋ねている。この質問は「じゃないですか²、」と強調を伴って発話されていることから、質問という形を取りながらも、IR自身はそのことに対して否定的見解を主張していることが理解可能である。これに対してIE1はIRの否定的見解に同意しつつ(11, 12行目)も、16行目に「でも」を用いて反論を展開することを予示する。16行目から19行目にかけての応答は、IEは授業準備やそれを授業に生かすことへのスタンスを「好き」「喜び」という主観的な尺度を用いて示している。割愛した80行の間ではIE1は再度介護の話に紐付けつつ、介護生活の中で行う授業準備のどこに「好き」や「喜び」があるのかを詳細化(Bilmes, 2011)する。次の抜粋1-2の100行目の「そっか¹¹」というIRの発話はそれに対する反応である。

[抜粋1-2] (抜粋1-1から80行省略)

100. IR : そっか¹¹:
101. (0.9)
102. IR : >なんかでも< (.) そうゆう準備って:好きじゃないと続かない[んじゃない
103. IE1: [う ん う ん . =
104. IR : =() 思います?:? [° 先生 >なんか< °

² 本稿のデータは2016年3月に収録した。

³ 筆者は2002年から2010年まで関東にある日本語学校で非常勤講師をしており、調査協力者たちとともに働いていた。調査当時筆者は修士課程の1年生であり、日本語教師はしていなかった。

105. IE1: [うんうん。
 106. IE1: 好きじゃないと:ってゆうか:(.)う:ん。
 107. (1.1)
 108. IE1: そうねな[ん か<(.)好+きってゆか(0.3)面白い+な_て思えるかどうかだと=
 109. IR: [う:ん。
 110. IE1: =「思うのね, う:んう:んう:ん。
 111. IR: 「あなるほどう:んう:んう:んう:んう:ん。

この100行目の「そっか:」という発話は、これまでに行われてきた語りになんらかのスタンスを示すものではなく、単なる情報の受け取りとして行われている。すなわちそれまでの語りがIRの期待する応答だったかどうかは示されていない。むしろ、一旦20行目(抜粋1)で終わったかに見えたトピックが、100行目の「そっか:」の後、0.9秒の沈黙を挟んで「>なんかでもく」と反論を投射する言葉から始まる質問によって再度やり直されていることから、IRが応答としては不十分であるとみなしており、応答を追求していると理解できる。ここではIE1が最初の質問に対して行なった応答(17行目)の中の「好き」という定式を再利用して仮定疑問の形で質問が行われる。IE1はそれに対してこれまでの「好き」の代わりに「おもしろい」と、授業準備へのスタンスを別の定式に置き換えることによって応答が行われ、それは111行目でIRに親和的なスタンスで受け止められている。この抜粋1の一連のやりとりを「再格付け」という視点で見えてみると、IRの2回目の質問は、1回目の質問を「一般性」という尺度において格上げした形で質問として組み立て直していると考えられる。それは1回目の質問がIE1個人に当てられているのに対して、2回目の質問は「好きじゃないと続かない(んじゃないか)」（102行目）と「〜と〜」という一般条件を表す表現を用いて非常勤講師一般に対して訊くものとしてデザインされているからだ。これに対して、IE1も「好き」という個人的嗜好の度合いの強い表現ではなく、「面白い」という授業準備そのものを形容することで、自らの応答の一般性を格上げして応答を構築していた。

4.2 「ただただおもしろかった」

下記の抜粋2はインタビュー開始後43分後の場面である。抜粋2-1に至るまで、インタビュー(以下IE2)は現在の勤務校での待遇の良さを挙げながら、時間外の労働についても十分に報酬が支払われるべきだと考えており、それは前からずっと考えていたことだという趣旨の話を行なっている。それに対してインタビュアー(以下IR)は前勤務校(約10年間勤務)では経済的報酬が少ないなかで、なぜ仕事を続けようと思ったのかを聞いている。

[抜粋2-1] (インタビュー開始から43分後)

1. IR: .hでも(.)まべいもちょっと少ないし:
 2. IE2: うん[べいも(.)うんでもね:う:ん
 3. IR: [でも:(.)でも続けよう
 4. (0.3)
 5. IR: 思った
 6. (0.5)
 7. IR: のは
 8. (0.8)
 9. IR: なぜ.
 10. (1.2)
 11. IE2: °おもしろかったから°=
 12. IR: °°おもしろかったから°(.)[ふ::ん。
 13. IE2: [ただ
 14. IR: ただただ。
 15. IE2: ただただおもしろか(h)っ(h)た(h)
 16. IR: [ふ:んえ何がおもしろ°いの°。
 17. (0.9)
 18. IE2: いろんな人と(.)[出会えるところがおもしろかったし[:
 19. IR: [う:ん。 [あ: [うんうん。

この抜粋の直前の、時間外労働について十分に報酬が支払われるべきだと前からずっと考えていたという応答は、それについて十分に支払ってこなかった前勤務校でも10年働いていた事実と矛盾する。1行目から9行目にかけてはIRはこれからの質問がそれに対するチャレンジであることを「でも」という接続詞(1行目)や、言い淀みを用いて(4,6,8行目)予示しつつ、この矛盾に対する応答を得るべく質問を組み立てている。その質問に対して1.2秒の長い沈黙の後、IE2はささやき声で「おもしろい」という尺度を持ち出す。さらにそれに「ただただおもしろか(h)っ(h)た(h)」と極端な定式化を行うことによって「おもしろい」の程度を格上げし回答を行なっている。しかしこの回答はIRに「ふ:ん」となんらかのスタンスを示すことなしに単に情報として受け取られたあと、「おもしろい」とは具体的にどのようなことなのか詳細化を促される。0.9秒の沈黙の後、「おもしろい」の具体的な内容を詳細化し始める。

[抜粋 2-2] (抜粋 2-1 から 16 行削除)

36. IR : う:ん. でもそこすゝごい大変なとこでしょ, [それこゝそ:.h
37. IE2: [そ:そそ(.)そこができれば
38. IR : ないじゃん. お金
39. (.3)
40. IR : そこに
41. (.3)
42. IR : 払われる [h पे(h)イ(h)が haha.
43. IE2: [そうそうそれはもう自分のホビーですよ, (.) 楽[しみ
44. IR : [あ**ホビー**?
45. IE2: う:ん. (.) huhu
46. IR : すばらしい考え方だ(.) [huhuhuhu (.) hu
47. IE2: [huhuhuhuhu だいろんなことをこう:
48. IR : うん.
49. (.2)
50. IE2: これやってみたらどうかかと [か: どういう反応があるかなとか:
51. IR : [うんうんうんうんうんうんうん.

割愛した16行の間に、IE2は「おもしろい」とはどのようなことかを、どうやったら学習者にわかるように教えてあげられるか工夫をすることで詳細化をしている。しかしそれに対してIRは沈黙や笑いを挟んでネガティブさを緩和しつつも否定的な見解を示す。この否定的な見解は1回目の質問で「ペイが少ない」(抜粋1の1行目)とされていた授業準備を「ないじゃん. お金」「そこに」「払われるペイが」(36, 38, 40, 42行目)と「経済的報酬の多寡」という尺度において極限である「ない」に再格付けすることによって行われている。それに対してIEの応答はIEはこの見解に対して「そうそう」と同意した上で、その教えるための工夫を「自分のホビー」/「楽しみ」と、「おもしろい」と再定式化する。この再定式化は、IRの行なった再格付けに志向する形で行われていると考えられる。授業準備を経済的報酬の発生するものではなく、むしろ自分が金銭を投資することもある「ホビー」や「楽しみ」に再定式化することによって、授業準備を「経済的報酬の多寡」という尺度において、応答追求でインタビュアーが位置付けた「ない」という位置に置いて応答を行なっている。それに対してIRは「あ**ホビー**？」と驚きをもって繰り返しつつ、「すばらしい考え方だ」と肯定的なスタンスを示している。

5. 議論とまとめ

本研究ではインタビューにおける応答追求とそれに対する応答がどのようになされているかを再格付けという観点から分析した。上記の分析は連鎖の中でどのような尺度が用いられ、どのようにそれが相互行為の達成に関わるかを詳述したものである。この再格付けを相互行為上どのような役割を果たしているかという観点からみると、インタビュアーの応答追求での再格付けは、最初の質問よりもインタビュアーの否定的な見解、チャレンジの度合いを高める役割を果たしていると考えられる。一方、インタビュアーの応答では、インタビュアーの示す尺度に志向しながらも、「面白い」「ホビー」「楽しみ」といった肯定的な表現を用いていることがわかる。このことは、先の授業準備へのやりがいの語りをあくまでも「授業準備への経済的報酬が少ない」というインタビュートピックに紐づけようとするインタビュアーへの抵抗であるとも受け取れる。上記の分析からはインタビュアーの参加者がインタビュートピックに基本的には志向しつつも、実はその中でそれぞれのそのトピックに対するスタンスを示したり、またそれを示すことによって相手に同調したり抵抗したりしつつ回答を構築していくことが明らかになったといえよう。この構築の様相をつぶさに観察していくことは、今後インタビューの応答追求と応答の特定のやり方の解明とともに、そのトピックに対するインタビュー参加者の理解も明らかになると考えられる。

6. 参考文献

- Bilmes, J. (2011). Occasioned Semantics: A Systematic Approach to Meaning in Talk. *Human Studies*, **34**, 129-153.
Bilmes, J. (2019). Regrading as a conversational practice. *Journal of Pragmatics*, **150**, 80-91.
Deppermann, A. (2011). The study of formulations as a key to an interactional semantics. *Human studies*, **34**, 115-128.
勝部三奈子 (2019). 時間外労働の「ホビー」というカテゴリー化: 日本語教師へのインタビューにおける成員カテゴリー化実践. 言語文化共同研究プロジェクト 2018, 31-40.
Pomerantz, A. (1986). Extreme case formulations: A way of legitimizing claims. *Human studies*, **9**(2-3), 219-229.
Prior, M. T. (2016). Formulating and scaling emotionality in L2 qualitative research interviews. In M. T. Prior & G. Kasper (Eds.), *Emotion in multilingual interaction* (pp. 203-236). Amsterdam: Benjamins.